

三学の説示内容に関する対照作業ノート

南 清 隆

0 はじめに

筆者は、先に発表した小論^(※)で修道法の基本的集成の代表である「三学」の成立と展開について若干論じたことがある。そこでは、初期経典の中で戒・定・慧の三学が整った形で、具体的内容が説示されている代表的な経典を比較して、いくつかの問題点を指摘した。とくに、内容的に見てヴァリエーションがかなり見られる戒学と、きわめて固定的なストックフレーズで解説される定学・慧学との差異に注目した。拙稿は、前稿を受け、説示形態や説法の説者と聞者の傾向、あるいは漢訳対応経典との比較、そして具体的内容に見られるヴァリエーションに対するさらなる考察を加えんとするものである。

(※) 拙稿 「三学の成立と展開」(『華頂短期大学研究紀要』第50号, 2005年12月 pp.(99)~(109))

なお、以下の記述における略号は、CPD等の一般的略号を用い、パーリ文はPTS. ed.に依拠する。

1 三学を説く資料の対照

前掲小論で、とくに三学の内容を詳細に解説する初期経典資料の主要なものを取りあげ、それらで列挙されている項目の比較対照を試みた。ここで、作業結果である表のみを再掲すると以下⁽¹⁾のようになる。(fig.1)

そして、この表に掲げた五種のパターンは、次のような諸点を主な理由として、左から右(つまり①~⑤)へと順に発展的展開を示していると見られる。

fig.1

	① M39	② M27他	③ M53	④ D2	⑤ M77 [※]
戒	慙と愧を具える				(出家の功德の例)
定の準備段階	身・語・意と ājīvaの 正しい行い	sikkhāと ājīva sīlakkhandha	pātimokkha =	=pātimokkha と sīlakkhandha	=sīlakkhandha
	感官の制御	=感官の制御	=感官の制御	=感官の制御	
	食物に対する量		=食物に対する量		
	覚醒の實踐 正念と正知	= 正念と正知	=覚醒の實踐 =正念と正知 七つの法	=正念と正知 満足	
定	遠離(五蓋) 四禪	=遠離(五蓋) =四禪	=四禪	=遠離(五蓋) =四禪	=四禪 (様々な能力)
慧	三明	=三明	=三明	六通	=六通
解脱	心解脱	=心解脱	心解脱と 慧解脱	心が解脱する	心解脱と 慧解脱

① M39=Mahāassapurasutta

② M27=Cūlahatthipadopamasutta=M51および M76

③ M53=Sekhasutta

④ D2=Sāmaññaphalasutta

⑤ M77=Mahāsakuludāyisutta

※ ⑤ M77は、他經と比較するときわめて特異な説示方法でまとめられているが、ここでは主に三学に関連する項目を掲げた。(前掲拙稿 pp.(103)~(104))

戒学 項目の羅列的な表現から、学処(sikkhā)という包括的な用語を用いるようになり、戒蘊(sīlakkhandha)というまとまった集成を意味する用語が現れ、最終的に pātimokkha という集編の名称による表現を用いる。

慧学 三明から、それらをも含み入れた六通へと次第する。

解脱 心解脱に、より深い意味合いをこめて慧解脱という表現が付加される。

しかしながら、このような順序がそのまま成立的な次第を反映しているものなのか、あるいは各經の説示内容との連関でヴァリエーションが見られるだけなのか、というような疑問をいまだ残している。また、全体的な対照から、このような特徴が見られるのであるが、それでは個々の事柄をより詳細に検討し

た場合はどのような問題点を指摘できるのであろうか。新たな視点も加えて、さらに考察を進めてみよう。

2 考察の視点

類似した説示内容の詳細を比較したとき、ヴァリエーションが生じていることに対しては、以下のようないくつかの原因が想定できる。

- イ. 文献全体の所属等によって成立的な新旧が要因となっている場合
- ロ. 部分的な思想的展開が見られる場合
- ハ. 説示の具体的シチュエーション（説示目的や対告衆の相違等）に相違がある場合

それでは、fig.1の①～⑤の經典類を中心に、これらのことを比較検討してみよう。

まず、イについては、三学の内容を具体的に解説する經典は、当然のことながらある程度以上のまとまった分量があるため、その編纂趣旨からも中部・長部に集中して配されている。それゆえ、所属から成立的な新旧を論じることは困難であろうとしかいえない。また、經典間のヴァリエーションの原因を考えると、漢訳との対応も当然考慮しなければならない。そこで、①～⑤の諸經に対応する漢訳の記述を探ると、次の三經にパーリ M に見られる三学の列挙部分と対応する内容が存在する⁽²⁾。

中阿182「馬邑經」(①に対応)

1. 身行清浄
2. 口行清浄
3. 意行清浄
4. 命行清浄
5. 諸根の守護
6. 出入を知るを学ぶ
7. 独住

- 8. 五蓋を捨てる
- 9～12. 初禪～四禪
- 13. 漏尽智通（他の神通の記述なし）
- 14. 心解脱

中阿146「象跡喻経」（②の M27に対応）

- 1. 学処の受持（殺を離れ…）
- 2. 非時食
- 3. 諸根の守護
- 4. 恒に正知を起す
- 5. 独り遠離に住す
- 6. 五蓋を捨てる
- 7～10. 初禪～四禪
- 11. 漏尽智通
- 12. 心解脱

中阿207「箭毛経」（⑤に対応）

五法の修習（麤衣・麤食・少食・麤住止床座・燕座）

さらに五法 無上戒

無上智慧

無上智見

愛箭を厭う

宿命智通・漏尽智通

これら、三つの内容を先のパーリのもとの対照してみると、細部の出入りはあってもそれぞれが対応関係ごとに概ね一致していることがわかる。各経の記述内容の特徴である次のような点、すなわち、

「馬邑経」と①では、戒の内容である「身・語・意と ājīva（生活）を正

しく行う」がそのまま対応し、その他の項目も概ね対応すること、
「象跡喩経」と②でも、戒の表現に学処と sikkhā というように、対応する語が用いられること、

「箭毛経」と⑤でも、他とは異なる五法としてまとめた記述方法が⁽³⁾ほぼ一致すること、

というように、各経の説示内容のパターンは等しく、内容もよく一致している。また、定を解説する場合は、漢巴ともに定型的な四禪が統一的に用いられている。さらに、慧については、漢訳は漏尽通のみ挙げられることが多く、三明ないしは六通の最後のみを訳していると考えられるが、その三明も六通も通常の順序では漏尽通が最後におかれるのであるから、どちらの省略かは判然としない。しかしながら、いずれにしてもそれぞれの経が有する特徴的な戒の説示内容からは、漢巴に伝承経路が分かれる前から、それぞれの經典ごとに固有の記述内容が存在していたと見られることになる。

次に、口については、とくに戒学における個々の用語の出現例等から、別項にて検討を加えたいと考えるので、先にハについてを見ておこう。

これらの諸経が、誰によって（説者）誰に対して（聞者）何を目的として（説示目的）説かれたかを示すと、次のようになる。（fig.2）

さらに、④が属する D の戒蘊13経には、すべての経に〔梵網経〕のみ部分

fig.2

	説者	聞者	説示目的
①	ブツダ	比丘たち	沙門を自認するための心得として
②	ク	バラモン	「象の足跡の喩」の具体的内容として
M51	ブツダ	遊行者 [※]	正しい実践者の修道法として
M76	ブツダ	遊行者	邪説を破す無欠な修道法として
③	アーナンダ	在家者(釈迦族)	有学の実践者が覚りを得る要目として
④	ブツダ	アジャセ王	沙門たるものの徳目として
⑤	ク	遊行者	ブツダが弟子に尊敬されている理由として

※ 遊行者への説法から始まり、後半部分に比丘たちに対する教説も続く。

fig.3

説者	※ 聞者	13経中
ブツダ	バラモンを含め異学者	9 経
ブツダ	在家者	3 経
アーナンダ	異学者 (バラモン)	1 経

※ 説示場所には、比丘僧伽は伴っており、ここでの聞者は直接の問答者を指す。

的に) 三学の説示が含まれるが、それら13経の説者と聞者とのみを④も含めて要約すると、上 (fig.3) のようになっている。

このように並べてみると、fig.2の諸経は、説者・聞者・説示目的のいずれにおいても、すべてに共通するような際立った統一性があるわけではない。説者の項では、アーナンダが疲れたブツダに代わって説示する点が特徴的ではあるが、このような例はたとえ割合としては少なくとも、決して特異なものではない。Dの戒蘊編13経の中にも上記のように1経(No.10)存在しており、D中だけでももう1経(No.23 Kumāra Kassapa 長老が説者) 見ることができる。また、説示目的もそれぞれであり、何か特定のパターンが必ずあるというわけではない。もちろん、三学の内容自体が修道の基本の説示であるから、特殊なテーマに対する教説ではなく、基本的な点を相手に説示しているということでは各経共通しているといえるが、そのことを新たに見出した特徴とはいえない。ただし、聞者に関しては、經典たるものは比丘に対しての説示が一般的であろうと考える固定観念からすると、全7経中にそのような形が1経しかないことは、いささか特徴的といえる。そして、それはfig.3の三学の解説を含むD戒蘊編の13経すべての聞者が異学者か在家者である点をも考え合わせると、きわめて特色のある現象とみなせる。比較のために、例としてD戒蘊編以外の諸経19經典中に出家の弟子(比丘・沙弥)に対して説示されているものを数えると、少なくとも12経にのぼり⁽⁴⁾、すべての經典の統計を出したわけではないが、この程度の数的割合が一般的のものであろう⁽⁵⁾。もちろん、ブツダが仏教の基本を明かすことがDの戒蘊編の目的であるから、編纂に際して内容的な点で聞者が在家者も含めて仏教の初学者である経が、たまたまこの編に集中して集め

られたとも考えられる。ただし、各経がほぼ統一的に有する三学の説示内容については、一部の経での説示方法の相違や、漢訳との対応関係を考慮すると、戒蘊編としてこれらの經典がまとめられてから（本来有していなかったものにも）付加されたとみなせる。⁽⁶⁾ そうすると、むしろ三学の説示に相応しい經典が意図的に集められたと見ることができる。そのことはそのまま、聞者である彼ら初学者に対して仏教の実践道の基本として説示されるべき内容が三学であることを示しているのであり、言い換えれば、三学が仏教内はもとより、仏教外に対して修道体系の代表として語られる基本という位置を占めていたことの象徴といえるであろう。さらには、このような説示内容から考えると、仏教ではこのような修道体系を有し、このようなセオリーで覚りへの道に励むのであるということ、とくに異学者たちも含めて一般に理解させる用途をこの三学が持っていたことになるのではないだろうか。

以上の考察によって、

三学の、とくに戒に顕著なヴァリエーションは、漢巴の伝承経路が分かれる前から、それぞれの經典で固有の特徴として伝えられていること、

三学の説示を含む經典の説示形態は、聞者が異学者や在俗者に対してなされることが多い傾向にあること、

が指摘できよう。それでは、これらの点を踏まえうえて、次に残された問題点である口について、検討を加えてみよう。

3 戒の説示におけるヴァリエーションについて

パーリ・漢訳いずれの対照においても、ヴァリエーションが多彩な箇所は、戒と次の段階である定の四禪定への導入部分であり、前稿でもこれを問題として、このような変遷は、

（定や慧が人間存在の現実的なステージでは到底獲得可能とはいいがたい能力であるのに対して、戒の諸項目は）現実的な日常生活におけるさまざまな事柄であることに注目し…そのような現実的な事項が、時代の流れや教理

的な発展の中で徐々に変化を蒙るのは極めて当然の結果と首肯できる。
と理解した。⁽⁷⁾

とくに、ここでのヴァリエーションで特徴的な点は、生活規範や倫理的な事柄について具体的に説いたものを、それぞれの經典で学処 (sikkhā), 戒蘊 (sīlakkhandha), 波羅提木叉 (pātimokkha) というような用語で表しており、各経でそれらが異なった表現を用いていることである。前掲の表 fig.1 に対照した①～⑤の経の中で、(特異な教説方法をとる⑤を除いて) ほぼ共通に存在する「感管の制御」の項目の前にある、戒の説示部分を詳しく対照してみよう。

①では、身・語・意の三業のそれぞれと生活習慣とも解すべき ājīva の四項目を清浄にと個々に並列的に解説する。

②では、sikkhā と ājīva を並列した複合語を用い、その二つの具足に関して具体例を説示し、さらにそれらを聖なる戒蘊 (ariyasīlakkhandha) と呼ぶ。

③では、戒を受持する者 (sīlasampanna) の具体的説明として、(文献としての存在ではなくとも) 明文化された集編を前提とした波羅提木叉 (pātimokkha) によって身を守護する者として、学処を学ぶ (sikkhati sikkhāpadesu) という表現が用いられる。

④では、③とほぼ同様な解説の後、具体的な戒に関する長文の解説が続き、それらを sīlakkhandha と表現する。

このような推移を自然の流れとしてみると、そのまま先の順序で戒が集大成されていく変遷を捉えたものと考えられるのであるが、果たしてそのように理解してよいのであろうか。

これらの用語の中で、もっとも集成の整った形と考えられる pātimokkha にしても、パーリ語資料の中でも一般に成立が古いものの一つと認められている Sn の最古層の部分にも使用例が見られる。そこでは、

…patipadam vadehi, bhaddan te, pātimokkham atha vā pi samādhim
v921cd

(どうか道を説いてください。pātimokkha を、そしてまた samādhi を)

というように、戒と定を具体的に想起させる語が並べられている。また、Sn の同じ章では、

tattha sikkhānugīyanti… v940a (そこで、学処が順次語られる…)

として、これに続いて、慢心・怒り・貪り・放逸等を戒める具体的項目が列挙されている箇所も存在する。さらに、Sn 中の pātimokkha の用例を他に見ると、これらよりも新層とされるが、第2章に、

samvuto pātimokkhasmim indriyesu ca pañcasu, v340ab

(pātimokkha に基づいて、そして五官を制御する)

という一例も見られる。これらを見ると、単数で出る pātimokkha は複数の条項を集成した集合名詞として、sikkhā は一々の具体的項目として、つまり一般的な意味概念で用いられた用例として理解してよいと考えられる。そうすると、自然に考えて今問題にしているどの経典も、現存形の成立時にこれらの用語や、その語によって示される集成が存在していたことになろう。

この点については、D 戒蘊編の No.1と2以下における、戒に対する微妙な立場の違いと評される一文が、考察の一助となる。D 戒蘊編の13経の No.1である「梵網経」のみが他と比べて、戒学のみ不完全な記述を伝え、なおかつその戒に対する態度がやや古い言い回しを残していることは、すでに指摘されており、筆者も過去に取り上げたことがある⁽⁸⁾。その新旧の言い回しの古いほうを残す「梵網経」では、戒の項目自体はほぼ同文を伝えているにもかかわらず、これらを単に戒と称することはあっても⁽⁹⁾、No.2「沙門果経」以下に統一的に見られる戒蘊や波羅提木叉というような表現を用いる文は存在しない。もちろん、先の Sn の用例でも明らかなように pātimokkha という語については、具

体的内容は明瞭ではなくとも最初期の段階から存在していたのであるから、用語が用いられていないからといって存在しなかったというのではない。しかしながら、用いられていないということは、当時まだ一般的な用語ではなかったということを示しているとも考えられるのではないだろうか。つまり、比丘間では周知のものであっても、異学者や初心者にも理解できるように語る場合には、まだ一般性を得ていなかったものと考え、そのようなシチュエーションで語られる經典の説示では使用を躊躇したのも首肯できる。それが時代の経過を経て、現存形態としての成立が新しい經典では、普通に用いられる用語として pātimokkha が理解されるようになっていたと見ると、このようなヴァリエーションの存在は理解できよう⁽¹⁰⁾。そして、そのように見ると、これらの經典の用いる用語や内容の異同は、そのまま成立的推移を反映していると解せることになる。

4 小 結

以上の検討によって、知りえたことと今後の考察の要点を簡単に列挙してみよう。

まず、前稿の小論でも、また拙稿でもたびたび触れたが、三学の全体を具体的に解説する經典類は、ニカーヤの段階では、主に戒を説示する部分に顕著なヴァリエーションが見られるのに対して、定と慧、そして解脱の表現については、三明がそれも含めた六神通に置き換えられる程度の固定的な表現が目立つ。もちろん、三明から六神通への変化も項目としては大きな変化ではあり発展的推移を看取できるが⁽¹¹⁾、戒の説示部分のような複雑なものではない。そして、この戒に関して、種々のヴァリエーションが見られることを前稿の結論として先に引用した、「…現実的な事項が、時代の流れや教理的な発展の中で徐々に変化を蒙る」という見解に修正を加えることはない。しかしながら、ここで言う変化を蒙る要因としては、ただ単に新しい用語が出現してすぐに取って代わるというような単純なものではないようである。ある時期用語や概念が並存しているながら、時と場合により相応しい用語が用いられ、より包括的なものが一般

化されて、浸透度が高くなるとそちらの方が用いられるようになっていくというような複雑な過程を考慮しなければならない。しかもその変遷は、漢訳との対照等も踏まえて考えると、数百年というような長い期間ではなく、ブッダの滅後数代という短い時間的経過の中での変遷であったと推察できる。今後、戒の具体的項目をも詳細に比較対照し検証していきたい。

さらには、三学が修道の基本的集成であることはいままでもないこととしても、それを説く經典の聞者は異学者や在家者に偏っている傾向にあることは、この教説が仏教の基本を広く示すものとしての用途があったのではないかという点が指摘できる。それでは、このような場合以外にも、説示内容によって説者と聞者に特色が出ることがあるのか、別の視点から検討しなければならないであろう。

註記

- (1) 先行業績で次の二書は大いに参考とした。

水野弘元『原始仏教』(サーラ叢書4, 平楽寺書店, 1956年) pp. 217-30。

田中教照『初期仏教の修行道論』(山喜房佛書林, 1993年) pp. 169-96。

- (2) 各經の対応関係は次のとおり。

① M39=中阿182「馬邑經」

② M27=中阿146「象跡喻經」

M51=対応なし M76=具体的内容の対応はなし cf. 雜35-4

③ M53=具体的内容の対応はなし cf. 雜43-13

④ D2= ※

⑤ M77=中阿207「箭毛經」

※戒蘊編に語られる三学については、拙稿「Sāmaññaphala-sutta 覺書」(華頂短期大学研究紀要第30号 特に pp. (26)~(29)) 参照。

- (3) 前掲拙稿「三学の成立と展開」p. (103)~(104)

- (4) Dの他經(19經)での説者と聞者との関係は次のとおり。

説者	聞者	19經中
ブッダ	異学者	2 經
ブッダ	在家者	2 經
ブッダ	天	2 經
ブッダ	出家の弟子(含沙弥)	12 經
ブッダ	說法機会が多く特定困難	1 經(涅槃經)

なお、本文中「少なくとも12經」と表現したのは、上記の最後の「涅槃經」は周知

のように大部な物語として、大まかに分けて六つの説法場面が登場し、聞者が（場面によって出家者と在家者が）交錯しているためである。

- (5) 試みに、M の前半「根本五十篇」の50経を見ると、

ブッダから比丘への説法 37経

仏弟子から比丘への説法 5経

ブッダから異学者ないしは在家者への説法 7経

仏弟子の述懐 1経

というような説者と聞者の割合となっている。ただし、特定の意図を持ってまとめられた集編等の場合は、大きく偏ることもある。たとえば、M の No. 51～100 の 50経は、聞者の人名を経名に付す場合が圧倒的に多く、異学者や在家者の登場回数が多い。

- (6) 註(2)の前掲拙稿参照。

- (7) 前掲拙稿「三学の成立と展開」p. (107)

- (8) 宇井伯寿「八聖道の原意及びその変遷」（『印度哲学研究』第3巻，rep. 岩波書店，1965年）pp. 44～46。

佐藤密雄『原始佛教教団の研究』，山喜房，1963年，pp.125～131。

前掲拙稿「Sāmaññaphala-sutta 覚書」p. (28)。

- (9) 戒の具体的項目を説示した直後に…sīlamattakam yena puthujano … (Di p. 3ff) という語が、あるいは、sīlavā…という語が見られる。

- (10) fig.1の經典中の、M に属するものなかで pātimokkha の語を用いる唯一の經典である③には、漢訳の対応經典が見出せないこともこの推測を側面から支持する。

なお、pātimokkha が在俗者に対して読誦が避けられていたことについては、拙稿「初期經典の一樣態」（佛教大学大学院紀要第12号，1984年）pp. 88以下を参照。

- (11) 三明から六神通への展開については、榎本文雄「初期仏教における三明の展開」（『仏教研究』（浜松）第12号）を参照。